

つぼ た じょう じ
坪田譲治
ぶん がく がっこう
文学“楽校”



もくじ

楽校長からのごあいさつ……………	1
けんかタロウとけんかジロウ…………	2
きつねとぶどう……………	5
デンデン虫……………	8

作…坪田譲治
絵…堀川理万子
企画監修…村中李衣

楽校長からのごあいさつ

みなさん、坪田譲治文学楽校へようこそ。

ここは、「楽校」です。たのしくわくわくしながら、気づいたら譲治さんと仲良くなれていたり、自分のことばや絵を切符にして、本の世界を自由に旅できたり、と
いろいろな文学体験をしてみたいと思います。

この「楽校」の規則はひとつだけ。

それは、自分の心にウソをつかないということです。たとえば、太陽が笑っているとは思っていないのに、にこにこ笑っている顔に描いたり、「これからはもつとがんばりたい」と思っていないのに「もつとがんばりたい」と書いてはいけません。こんなふうにしたら、きっと大人が「よくできました」とほめてくれるだろうな、と考えて、自分の心にウソをつくと、できあがっても楽しくないでしょう？

坪田譲治さんは、自分のつくったお話と出会うことで、みなさんひとりひとりが、岡山で生きている今この時を、うんと幸せに過ごしてほしいと空の上で願っているはずですからね。

楽校長
村中李衣

けんかタロウとけんかジロウ――●

いなかのがっこうに、タロウくとジロウくんというふたりのこどもがありました。ふたりは、きょうだいではありません。それなのに、こんななまえでしたから、みんなからあにやおとうとのようにいわれました。

「タロウくん、おとうとがないてるよ。」

「ジロウ、にいきさんがいじめられてるぞ。」

そんなことをいつてからかったりするのです。

それでふたりは、なるべく、いっしょにいないことにしました。いっしょにいないばかりか、いつとなく、ながわるくなりました。

「ジロウのばか。」タロウくんがいえば、

「タロウのいじわる。」

ジロウくんがいいました。すると、みんなはおもしろがって、

「やあーきょうだいげんか、きょうだいげんか。」と、まわりをとりまいて、はやしました。こうなると、ふたりは、そのままだまっておれなくて、つかみあいのけんかなんかすることがありました。みんなはそれで、いっそうおもしろがって、



「タロカて、タロカて。」とはやしたり、

「ジロカて、ジロカて。」とはやしたりしました。

ふたりはほんとうは、けんかなんかしたくなかったのです。ことにジロウくんは、いつもニコニコしている、いいこもだったのです。それがこんなことで、たびたびけんかをするようになりました。そしてふたりはとうとう、みんなからけんかタロウけんかジロウとよばれるようになりました。

ある日、ふたりはまたけんかをしました。そのかえりみちタロウくんがむらのちかくへやってきますと、みちばたにちいさなこどものおじぎょうさんがたっていました。もうひやくねんもむかしから、そこにたっているおじぎょうさんです。かわいらしいかおをしていて、いつもニコニコわらっております。タロウくんは、それを見ると、ジロウくんのニコニコがおをおもいでした。いまけんかをしたばかりで、しゃくにさわってたまらなかったので、タロウくんは、みちにおちてたいしをひろうと、ちからいっばい、そのおじぎょうさんにぶつつけました。

いしはおじぎょうさんのひたいにあたり、そこがポコッとかけておちました。しかしいしのおじぎょうさんですから、いたいともいわず、やはりニコニコわらっていました。タロウくんはこれを見ると、たいへんきがとがめて、にげるようにはしつかえりました。

あくるあさ、タロウくんは、そのみちをやってきて、おじぎょうさんのかおをみました。お

じぞうさんは、ひたいにきずをしながら、やはりニコニコわらっていました。タロウくんは、またきがとがめてそこをはしつてとおりました。

そのあくるあさ、タロウくんは、またおじぞうさんにあいました。やっぱりおじぞうさんは、ニコニコしております。タロウくんは、すっかりこまりました。ちょうどひとりでしたので、おじぞうさんのまえに、あたまをさげ、

「おじぞうさん、おゆるしください。」

と、おわびしました。こころのなかでは、

「もうけんかはいたしません。」

といました。そして、その日がっこうでジロウくんにあうと、

「ジロウくん、これやるよ。」

そういつてエンピツをやりました。ジロウくんはびつくりしました。それでもすまないとおもって、

「じゃ——ぼくはこれをやるよ。」

そういつてケシゴムをやりました。

それから、ふたりはすっかりなかよしになり、ほんとうのきょうだいのようになりました。みんなは、もうけんかタロウとも、けんかジロウとも、いわなくなりました。なかよしタロウなかよしジロウというようになったのです。

きつねとぶどう



山の中のきつねのすで、きつねの子がなっていました。

「こーんこん、おなかがすいた。」

すると、おやぎつねがいました。

「待つておいで、今おかあさんがおいしいものをとってきてあげる。」

こぎつねはなくのをやめて、おとなしく待つていました。一時間待ちました。おやぎつねは帰ってきません。二時間待ちました。まだ帰りません。三時間待ちました。それでも帰ってきませんでした。こぎつねはどうとうなさだしました。

「またおなかがすいてきたあ。」

おやぎつねはどうしたのでしよう。じつはその時、村へ行つてぶどうを一ふさとしてこようと一生けんめいかけていました。

一つ山をこしました。二つ山をこしました。三つの山をこした時、やっと

ぶどうの村へつきました。

「おなかがすいて子どもがなっているのです。すみませんが、ぶどうを一ふさいただきませう。」

おやぎつねはそういつて、ぶどうの木にとびあがり、大きなふさを取りました。それをくわえて、大いそぎで山の方へもどりました。一つ山をこえ、二つ山をこえ、また三つの山をこしました。きつねのすは、もうすぐ近くになりました。るすのうちにおそろしいわしなどに、あの子はさらわれはしなかったろうか。でも、あれ、こーんこんなきごえがしております。おやぎつねは安心しました。と、にわかにつかれがでてきました。持ったぶどうが、重くて重くてたまらなくなったのです。で、一本の木の下にそのぶどうの一ふさをおいて、やれくたびれたとやすみました。

ところがその時、やすむまもなく、すぐそばでわんわん犬のこえがしました。りょうしが犬をつれてもうそこにきているのです。

どうしましょう。ぶどうどころではありません。

こぎつねがてつぼうでうたれます。思わずおやぎつねは、大きなこえで呼びました。

「こーんあぶない。はやくにげなさい。」

こぎつねはこのこえにびっくりして、あなをとび出し、かけてかけて

山のおくへにげて行きました。

それから何年たったでしょうか。長い月日がたちました。しかしおやぎつねはどうとう

にわかに 急に。 とつぜんに。

帰ってきませんでした。おかあさんをさがして、山の中を歩いているうち、こぎつねは大きくくなりました。

ある時、昔おかしむかしおかあさんとすんでいたすの近くにやってきました。すると一本の木の下にぶどうがはえていました。そのつるが木にまきのぼり、たくさんのみごとなふさをさがらせていました。

「こんなところにぶどうがあったかしら。」

こぎつねはふしぎに思いながら、そのひとつぶをたべました。何とおいしいぶどうでしょう。

「ああ、おいしい。ああ、おいしい。」

こぎつねはのどをならして、次から次へとたべました。しかしその時、ふとおかあさんのこえを思い出しました。「まっとおいで、おいしいものをとってきてあげる。」

すると、そこにぶどうのなっているわけがわかりました。

「そうだ。」

そう思うと、今はどこにいるかわからないおかあさんに、こえをあげて、おれいをいいました。

「おかあさん、ありがとうございます。」



お母さんはお使つかいにいつて留守るすでした。美代ちゃんみよは熱ねつがあつてねていました。正太しょうたは、お母さんの言いいつけで、美代ちゃんみよの枕まくらもとへすわつてお話をわしてやっていました。すると善太ぜんたと三平さんぺいが外ぐわいから「兄ちゃんにいやアん。」と呼よび呼よび縁えんがわへかけつけて来きました。

「兄ちゃんにい、鮎ふなだ。大鮎おおふなだ。こんなにいるんだよ。鯉こいだ。ううん、鯉こいの子だ。十じぴき、二十にじゅうぴき。ねえ、三平さんぺいちゃん、三十さんじゅうぴきもいたねえ。あすこの、川がわの藻もの中なツ。えッどうする。」

善太ぜんたは両手りょうてで網あみをうつ真似まねなんかしたりして、とてもせきこんでいるのです。どうするツたつて、と正太しょうたはちよつと考かんがえて見みましたが、こうなつては、とりにかくよりほか、しかたがありません。そこで美代ちゃんみよに言いいました。

「ね、美代ちゃん、鮎ふなをとつて来きて上げようね。」

が、美代ちゃんみよは、けだるそうに、正太しょうたの顔かほを見上げたまま、返事へんじをしようともしませ

網あみをうつ 網あみを投なげて魚うしをとる

せきこむ いそいでいらだつ。あせる

「え、美代ちゃん、大きな鮎ふなだよ。十じぴきも二十にじゅうぴきもだよ。洗面器せんめんきへ水みづを入れて、泳およがせて遊あそぼうよ。面白おもしろいよう。」

それでも、美代ちゃんみよはやつぱり黙だまっています。

「どうオ、美代ちゃん、いらないの。いるでしょう。」

正太しょうたは、こんどは顔かほを、じつくり美代ちゃんみよの額ひたいぎわに近ひかよせて、何度なんども言いつて見みました。すると、美代ちゃんみよが、やつとのこと、かすかに、こつくりをしました。

「ああ、よかった。じゃア、兄ちゃんにいすぐいつてとつて来きてあげるよ。大きな大きな鮎ふな、二十にじゅうも三十さんじゅうもだよ、だから、ちよつとお留守番るすばんをしてよ、ね。じき帰かへつて来きるからね。そうだな。美代ちゃんみよが一つ二つと、十まで数かずえたら、そうら、鮎ふなだ、鮎ふなだつて、帰かへつて来きるよ。いいでしょう。」

ところが、また美代ちゃんみよは、それきり、顔かほを縦たてにも横よこにも振ふらないで、ただ目めをぱちぱちさせて、壁かべの方かたばかり見みています。

善太ぜんたと三平さんぺいはもういらいらして、枕まくらもとへ上あつて来きて、よう、ようと足あしぶみをします。で、正太しょうたは二人ふたりを縁側えんがわの方かたへつれていき、そこで小さな声こゑで言いいました。

「ね、二人ふたりで先に門かどのところへいつて待つてろよ。兄ちゃんにい、後あとからいくからね。静しずかにしてゐるんだぞ。さわいだらけなくなるからね。」

これを聞きくと、二人ふたりは美代ちゃんみよの方かたを見みかえり見みかえり、まるで泥棒どろぼうのように足音あしおとを



しのばせて、出ていきました。で、正太は美代ちゃんのところに戻って、首をかしげて考えこみました。美代ちゃんに留守番をさせる法はないかなア。うん、そうだ。正太はいことを思いつきました。

「美代ちゃん、でんでん虫好き。」

美代ちゃんは、こんどはすぐにこつくりをしました。

「好きだろう。ねえ、面白いよ、でんでん虫は。頭からニュウツと、こんな角を出してね、机の上でも、畳の上でも、のそりのそり歩き出すからね。脊中に大きなお家を脊負って、えんこらさ、えんこらさって歩くよ。」

正太は片手の人さし指を立てて、頭の上に角をこしらえ、片手を後へ廻して、からを脊負うようなかつこうをしながら、膝で畳の上を歩いて見せました。そして、角出せ、槍出せと謡いました。美代ちゃんは、口もとと頬に、かすかな笑いをうかべました。そこで、すかさず正太が言いました。

「美代ちゃん、でんでん虫とって来ようね。」

しかし、そう言くと、美代ちゃんは、またうかない顔をして、黙ってしまいました。

美代ちゃんは、熱で、ずきんずきんと頭が痛いのです。胸も苦しいのです。お母さんに側にいてほしいのですけれど、中々帰って来てくれません。それなのに、兄ちゃんまでが、外へいこうとするのです。美代ちゃんの目には少し涙が浮んで来ました。涙は頬をつ

たわってホロリとおちこぼれました。それを見ると、正太はかわいそうになって言いました。

「兄ちゃんがないと淋しい？」

美代ちゃんは、うんと、目で言いました。

「じゃあ、鮎とりにかくのよそうね。だけど、でんでん虫はお庭にいるからとって来てあげるよ。まってるね。」

ほんとにでんでん虫は庭の青桐の木にいます。さっき正太は見つけておいたのです。そこで立ち上がると、跣足のまま縁側から飛び降りて、青桐の下へ駆けていきました。そして上から下、横から横へと、目の玉をクリクリさせて見廻しました。と、何のこった、目の前の枝にとまっていた。正太はそれをつかんで、飛んでかえりました。

「美代ちゃん、でんでん虫、ほらほら。」と、枕もとのお盆の上にのせて、

「見てらっしゃい。今に角を出して、はい出すから。」

そう言うってから、正太は、角出せ槍出せと謡いました。美代ちゃんは、もう泣くのをやめて、おふとんの上に腹んばいになって、じっと見ていました。でんでん虫は全く正太の言った通り、すぐに角を立てて、そろりそろりと、はいはじめました。

「ね、面白いだろう。さわるとすぐ角ひっこめるよ。」

正太は、そつとからにさわつて角をひっこめさせて、また歌を謡つて、はわせました。でんでん虫はお盆の縁をのたりのたりと廻りました。美代ちゃんは次第に笑顔をして、おふとんから乗り出すようにして見入りました。

そのとき、門の方から善太と三平が待ちくたびれて、声をそろえて呼びたてました。

「兄ちゃアんツ。鮒とりにしようよッ。」

それで正太は言いました。

「美代ちゃん、でんでん虫もいいけども、鮒も面白いんだよ。洗面器の中へ金や銀の鮒を入れとくだろう。そうすると、それがびよびよいはねて泳ぐんだよ。そこへ兄ちゃん、また蟹をとつて来て入れたげら。すると蟹がね、大きなさみをおつ立てて、はさむぞう、はさむぞうつて、鮒を追っかけるの。」

そう言うのと、正太は右手ではさみをこしらえて、美代ちゃんの柔いお手てをチョキンチョキンとはさんで見せました。

「ね、蟹はこうして鮒をはさむんだよ。すると、鮒がね、痛いよう、痛いようつて逃げ廻

るの、おんおんつて、泣く鮒もいるよ。」

美代ちゃんは、お手てがくすぐったかったのか、つい、ニッコリしてしまいました。

「ね、美代ちゃん、鮒すきだろう。」

これで美代ちゃんは、また、こつくりをしてしまいました。

「じゃア、兄ちゃん、鮒とつて来てあげよう。蟹もね。だから、一つ二つツて数えていらつしやい。十になったら十ツて言うんですよ。そしたら、鮒と蟹もつて、飛んで帰ってくるから。」

美代ちゃんは、かすかに笑いました。そこで正太は、

「じゃ、行つて来るよ。」と、早口に言つたと思うと、もう玄関の外へ駆け出していました。正太が出て来たのを見ると、善太と三平は、いそいで田圃の方へかけつけました。三人が家から百メートルも離れたときのことです。一とうあとにいた善太が心配そうに二人をよびとめて言いました。

「ね、美代ちゃん、泣いてやしないかなア。」

これで、三平が立止つて、家の方へ耳を傾けて、

「あ、泣いてる。」と言いました。

「嘘だい。」と、正太と善太が言いました。泣いていたつてここまで聞える筈がありません。でも、正太は少し心配になって、一人で家の方へ駆けていき、門の中へ頭を突っこんで、何

度も耳を傾げました。それからまた二人のところへ駆けもどって来ました。

「泣いてた？」と三平が聞きました。

「ううん。」

正太は、かぶりをふりました。それから三人は、またドンドン走りしました。川の縁へ来て、少し上手へ歩くと、川をのぞきしていた善太が突然立ち止って、

「あッ、あすこだ。鮒、鮒、鮒。」三人は頭を、こちんこちんするように列べて、水の中を覗きました。全く、鮒がいます。大きいのが、十も二十も藻の陰に休んだり泳いだりしています。

「どうしよう。」と、三平がまた言いました。それで気がついたのですが、三人とも釣竿も網も持つてはいません。どうしたって言うのでしょうか。あんまり急いで、なにもたないで来たのです。三人は顔を見合えました。

「善太、とつて来い。」

「僕？」と言ったものの、こんどは善太が使をする番でした。しかたなく、善太は網をとりに、家の方へ駆け出しました。それで正太と三平は鮒を眺めながら、数を数えたり、大鮒が隠れているところを見つけたりして待っていました。

かぶりをふる 頭を左右にふって「いいえ」の気持ちをあらわす

ところが、善太はいつまでたってもかえって来ません。二人は待ちくたびれて、こんどは、家の方へ向いて、草の上に尻をすえて、しゃがんでいました。それでも、中々もどつて来ません。何十分と待ったような気がしました。やっと善太が網をかついで、バケツをさげてやって来ました。そこで正太が、

「どうしたんだ。」と聞いて見ますと、善太が門まで帰ると美代ちゃんが火がつくように泣いていたのです。びっくりして、部屋へ駆けあがって見ると、美代ちゃんは蒲団を離れて、畳の上に立って、からだをふるわせて泣いているのです。それで聞いて見ると、「でんでん虫が、でんでん虫が……。」と言います。見ると、でんでん虫が美代ちゃんの氷枕の上にとまって、角を立てていました。詳しく聞いて見ますと、はじめ美代ちゃんはおとなしく、でんでん虫のはい廻るのを見ていたのです。すると、でんでん虫は盆の上から次第に美代ちゃんの枕の方へ、はって来て、追っても追っても、角を立てて枕の方へ、あがつて来るのだそうです。

それで美代ちゃんは少しずつ頭をよけたり、蒲団の中へもぐったりして逃げていたのですが、でんでん虫は、しまいには蒲団の中まで入って来そうになりました。美代ちゃんはそれが怖くて、泣き出したのです。善太は、でんでん虫を、縁がわへもち出して、そこへおいて来たと言いました。

「なあんだい。」と、正太も三平も言いましたが、考えると美代ちゃんが、かわいそうにな

りました。何だか家の方で美代ちゃんの泣声なきごえがしているように思われました。

「よ、よ、かえろうよ。美代ちゃん泣ないてるよ。」

三平も心配しんぱいそうに言いました。そこで三人は、鮎ふなの方はそっちのけにして、川ッぷちに立って、家の方に首を延のびして、何度も耳を傾かしげました。泣声なきごえがするようにも思われれば、しないような気がします。

「鮎ふなとる？」

しばらくして三平さんぺいが聞きました。

「帰ろうよ。」と正太しょうたが言いました。

「帰ろうよ。」と善太ぜんたも言いました。三人はその方をのぞきこみました。三平がそこいらの石ころを拾ひろうと、正太も善太も大きなのを拾ひろいました。そして三人で、一二三ッ、ドブんと、鮎ふなを目がけて投げ込こんで、うわアと言って駆かけて帰りました。

美代ちゃんみよちゃんは、涙なみだをふきふき、ふとんの上にすわっていました。三人は、鮎ふなの話面白く美代ちゃんに話して聞かせました。でんでん虫むしは、縁えんがわで、はっていました。美代ちゃんみよちゃんがもういらないうので、善太は庭にわの木めがけて、力一ぱい投げすてました。

「よせよ。」と三平が言いました。ベツと言って、善太はふざけて舌を出しました。ベツベツ、べえエ。

●坪田譲治さんはどんな人ですか？

明治23（1890）年に岡山市北区島田本町しまだほんまちに生まれ、岡山駅のすぐ西にある現在の石井小学校に通いました。

学校のまわりには、一面に田んぼが広がり、きれいな川が流れていました。今では大きなビルや家が建たち並び、そのころのようすは、なかなか想像ぞうできませんが、譲治さんは豊かな自然しぜんの中で、しっかり遊んだり、本を読んだりしながら少年時代を過ごしました。



●譲治さんは何をした人ですか？

大人も子どもも楽しめるお話をたくさん作り、92歳で亡くなるまで、読んだ人たちに感動をあたえ続けました。

譲治さんは、大人になっても「ふるさと岡山」が大好きで、岡山を舞台ぶにしたお話も多く発表しました。その中で、主人公たちは、譲治さんの子ども時代の岡山を思わせる風景の中でいきいきと活躍かつやくしています。

坪田譲治の孫である西村真理さんから提供いただきました

岡山市ウェブサイト



朗読がここから聴けます



文学創造都市
おかやま



unesco

Member of
the Creative Cities Network

令和7年7月発行

岡山市文学賞運営委員会

岡山市北区大供一丁目1-1（岡山市スポーツ文化局スポーツ文化部文化振興課内）

TEL 086-803-1054